

あとがき

泉水英計

『ブラジル日本人入植地の常民文化』をようやく上梓することができた。近刊の建築編と合わせ、神奈川大学日本常民文化研究所にとってブラジル日系人研究の最初の成果報告となる。

ポルトガル語は二三のフレーズしか知らないという、なんとも心許ない状態でグアルーリョス空港に降り立ったのは2011年7月のことであった。前年にサンパウロ大学の森幸一先生が国際交流事業のために神奈川大学を訪問、研究会にてブラジル日系人研究史を解説し所員を鼓舞したのがきっかけであった。昨年はその先生の突然の訃報に驚き、今はご冥福を祈るばかりである。このパイロット調査では、現地で活躍する神奈川大学の卒業生から暖かいご支援を賜った。最終日には、在外研究で滞在中の安室知所員も加わりブラジル日本文化福祉協会にて常民研セミナーを開催した。熱心な聴衆が詰めかけ、サンパウロで日本文化研究への関心が高いことに強い印象を受けた。

翌年からは日本学術振興会科学研究費の交付を受け、まずは挑戦的萌芽研究「ブラジル日系移民および在日日系ブラジル人の民俗学的研究」（課題番号24652174、代表：佐野賢治 研究期間：2012年4月1日～2014年3月31日）としてパイロット調査の対象を拡大した。レジストロでは、連邦文化遺産（「リベイラ谷の文化風景」2010年7月）に登録されて間もない戦前の日系植民建築を金子国栄レジストロ日伯文化協会会長の案内で巡見し、歴史と民俗に加え建築学的な研究の見通しを得た。おりしも、最古の日本人植民地のあったイグアッペ（「桂」）、レジストロ、セッテバラスの隣接3市では入植一世紀の節目を迎え（記念式典、2013年10月）、周年誌『Centenário Colonização Japonesa』（2017年11月刊）の刊行準備も始まって郷土史への関心が高まっていた。

つづく科研費基盤研究や常民研共同研究については、「はじめに」で佐野賢治代表が触れているとおりである。共同研究メンバーがレジストロを訪れたとき、いつも暖かく迎えてくださり、ハンドルを握って方々を案内、話者を紹介し、また、ご自身も記憶を辿ってお話くださったのは、周年誌編集の指揮を執っていた福澤一興氏と清水ルーベンス武氏であった。ここでも重ねてお礼を申し上げたい。馴染みのない土地であらたな対象を設定し研究をおこなうには多くの困難があった。研究会への招きに応じ、専門的知識を提供してくださったのは、中牧弘充、石川新太郎、肱岡明美、福澤一興、吉村竜の諸氏であった。現地で通訳として時間を割いてくださったのは、大工原正、清水リナ、ヒサツグ・ブルーノ、池内さやかの諸氏であった。記して感謝を表したい。

ヒサツグ氏はサンパウロ大学時代に大学間交流事業で神奈川大学非文字資料研究センターに滞在していたことがあるが、森幸一先生の置き土産となったこの交換学生制度はその後も順調に継続しているようだ。また、国際常民文化研究機構では、「ブラジル国サンパウロ州レジストロ植民地における民具からみた日本移民の生活史の研究」という共同研究が現在進められている。ブラジルと結ばれた縁はこのさきも続くであろう。『ブラジル日本人入植地の常民文化』は初めの一步であり、これを踏み台に、より本格的な次の一步が大きく踏み出されることを願ってやまない。